

言語学研究における「言語共同体」は 経験的に揺るぎ無いものか？

徐子程

日本英語教育学会・日本教育言語学会・日本ビジネスコミュニケーション学会・教育の国際化研究会主催
早稲田大学情報教育研究所・早稲田大学言語情報研究所共催
日本英語教育学会・日本教育言語学会第50回年次研究集会 (JELES-50:2020)
日本ビジネスコミュニケーション学会2019年度第2回研究集会 (ABCJ-2020/03)
教育の国際化研究会 (IE-2020/03)
2020年2月29日～3月1日 @早稲田大学

<http://www.decode.waseda.ac.jp/announcement/2020-02-29-03-01-j.html>

目次

1. 問題意識

2. 先行研究と位置付け

3. 理論的な話を少し

4. 実験について

5. 分析と考察

6. 結論と展望

7. 文献

問題意識

言語共同体(一例としては「母語話者・ネイティブスピーカー」)のカテゴリーは言語学研究のコア仮説としては適切か否か？

この問題を議論するには二つのパーツに分けることができる。

- 理論上このカテゴリーはどのように正当化できるのか？

→徐(2019a)の議論(今回の研究の姉妹篇)

- 経験的事実においては、以上の仮説は妥当なものなのか？

より説明力のある優れた代案の仮説はあるか否か？

→今回の発表のテーマ

問題意識

決して自己PRのためではないが、問題意識をできるだけ分かりやすくお伝えするため、

まず↓↓↓の論文における議論を軽く確認しておきましょう。

Language Learning and Educational Linguistics 2018-19

言語学習と教育言語学：2018年度版

言語学研究における「共同体前提」は如何に正当化され得るか

徐子程

E-mail: m2015.jo.x@gmail.com

あらまし 本論文は言語学研究においての、言語を共有する共同体によるカテゴリー化を自明な前提として用い、そこから研究を展開させる現象に対し、かくした共同体に基づくカテゴリー化は如何に正当化され得るか、といった問題を検討する。まず、本研究の問題意識の正当性を主張し、及び議論する問題の定式化によって正当化しなけ

徐子程(2019a)「言語学研究における『共同体前提』は如何に正当化され得るか」『言語学習と教育言語学：2018年度版』, pp.29-39.

問題意識

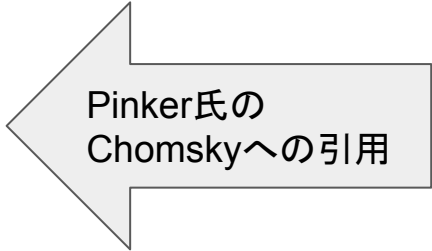
「言語共同体」という共通のキーワードが出てきていますが、
社会言語学や方言学などのバックグラウンドをお持ちの方ですと、
「言語共同体 (Speech Community)」と言えば、
まずは「○人×語 (ピジン言語)」や「特定の何らかの社会集団 (コミュニティー) の言語」
etc...
を思い浮かぶかもしれません。

しかし...

問題意識

↓ある種の言語の母語話者を一つの言語共同体だと見なす例↓

able [to the child]. Nevertheless individuals in a speech community have developed essentially the same language. This fact can be explained only on the assumption that these individuals employ highly restrictive principles that guide the construction of grammar.



Pinker氏の
Chomskyへの引用

By performing painstaking technical analyses of the sentences ordinary people accept as part of their mother tongue, Chomsky and other linguists developed theories of the mental grammars underlying people's knowledge of particular languages and of the Universal Grammar underlying the particular grammars. Early on, Chomsky's



Pinker氏の補足

問題意識

表現そのものにこだわらなければ、さらに...

それは母語話者が使うであろう文化的背景や知識に欠けるからである。(中略) イギリスで育った人であれば誰でも簡単にわかる引喩も、他の人たちには皆目見当のつかないことであっただろう。(Thomas 1995=成瀬訳 1998: 9-10)

この旅行者自身の文化では、You want to use?[お使いになりますか]という挿入連鎖は、このような状況では予想されないものであり、多分このような形では決して起こらなかつただろう。(Mey 2001=小山訳 2005: 393)

Thomas,J.(1995)Meaning in Interaction: an Introduction to Pragmatics, Longman.(J.トマス,『語用論入門— — 話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』, 浅羽亮一監修, 研究社, 1998 年)

May,J.L.(2001)Pragmatics: An Introduction, Second Edition, Oxford: Blackwell.(J.L.メイ,『批判的社会語用論入門— — 社会と文化の言語』, 小山亘訳, 三元社, 2005 年)

何れも徐(2019a)からの引用例ですが、「共同体」といった表現はなかったものの、国籍や社会や文化などの要素を言語と結びつけて共同体を想定している意味においては、何らかの形の「言語共同体」を画定しようとしている例だと思われます。



問題意識

こうしたややインフレの意味での「言語共同体」概念は(表現を特定すれば例えば「母語話者」、「x人」、「x文化」、「x社会」etc...)、

論者の主張を正当化できる根拠としても、議論の自明な前提としても、

といった意味においては言語学(の一部の研究)の堅固な土台である。

しかし、こうした土台をいざ質疑してみれば、

言語学研究における「言語共同体」の概念(カテゴリー)はどのように正当化すれば良いのか？

↑が徐(2019a)の議論の出発点でした。

徐(2019a)は特に「母語話者・ネイティブスピーカー」の概念に焦点を当て、

三つの正当化のアプローチを検討しました。

問題意識

三つの正当化のアプローチ: その一

「母語話者・ネイティブスピーカー」概念を一つ、または複数の自然的性質や事実に還元する。

類比すれば、

温度を分子の運動エネルギーによって説明？

倫理学の良さをそうした行動の帰結によって説明？

難点:

「母語話者・ネイティブスピーカー」概念を何に還元すれば良い？

時間？能力？アイデンティティ？満足のいく還元対象を見つけるのは難しい。

問題意識

三つの正当化のアプローチ: その二

「母語話者・ネイティブスピーカー」の存在性を認め、人間の成熟過程において「母語話者・ネイティブスピーカー」概念を獲得する。

難点:

こういったアプローチは問題意識に妥当な解決を与えるとは思えない。

「母語話者・ネイティブスピーカー」を自明な前提にする点は変わりがない。

問題意識

三つの正当化のアプローチ: その三

「母語話者・ネイティブスピーカー」の表現によって「母語話者・ネイティブスピーカー」といった存在を表象するような観点を諦める。

「母語話者・ネイティブスピーカー」の表現・概念が言語実践においてどのように成立し、使用されているかを見る。

難点:

正当化の案としてはあり、だがこうした「母語話者・ネイティブスピーカー」概念はもはや言語学の前提や根拠として成立できなくなるのでは？

問題意識

以上が徐(2019a)の概ねの議論でした。

そして、「言語共同体=母語話者・ネイティブスピーカー」は言語学の正当化できない悪しき概念になり兼ねない、と結論付けています。

前回までのあらすじはここまでとします。

ここで一つの問題が浮上します...

PS: さらに多くの問題があるのに違いないが、ここでは今回の発表の問題意識となる問題をのみ取り上げることにした。

問題意識

「言語共同体=母語話者・ネイティブスピーカー」を経験的事実と見なす論者からすれば、概念の定義の内実にある程度改訂すれば、「母語話者・ネイティブスピーカー」が言語学のコア仮説としては維持可能である。

正当化できていないことは当該仮説を動揺するものではない。

なぜなら事実だからだ。

したがって、本研究は**経験的事実の面においても、「母語話者・ネイティブスピーカー」の**カテゴリーは**言語学の仮説としては必ずしも揺るぎないものではない、と主張する。**

同時に、**こうした仮説に依存しない言語学の研究の可能性を示していく。**

問題意識

誤解①

「母語話者・ネイティブスピーカー」は存在しないと主張しているのか？

→存在しても良い、存在しなくても良い。本研究は「母語話者・ネイティブスピーカー」の存在については一切主張していない。

誤解②

「母語話者・ネイティブスピーカー」は規範ではないと主張しているのか？。

→主張の重点はここではない。しかし、先行研究にて示した通り、「母語話者・ネイティブスピーカー」と規範との同一視は言語学の研究方法論の危機をもたらしかねないことである。

問題意識

じゃ何を主張しようとしているか？

→言語共同体（一例としては「母語話者・ネイティブスピーカー」）の категория は言語学の研究のコア仮説としては必ずしも適切なものではない。且つこの観点のみを主張している。

この主張の根拠づけとは何か？

→ミニマリズムの「N・NN」の仮説によって予測・説明できない現象が存在し、且つ「N・NN」に依存しない他の仮説によって予測・説明ができる。

目次

1. 問題意識
- 2. 先行研究と位置付け**
3. 理論的な話を少し
4. 実験について
5. 分析と考察
6. 結論と展望
7. 文献

先行研究と位置付け

じゃ「母語話者・ネイティブスピーカー」のカテゴリーはそもそもなぜ言語学の問題になるのか？

1. 研究方法論における妥当性の問題
2. カテゴリーにまつわる権力関係と規範の問題
3. カテゴリー化の正当性そのもの

の三つの軸に沿って先行研究を概観してみましよう。

先行研究と位置付け

1. 研究方法論における妥当性の問題

根本的な出発点:

「母語話者・ネイティブスピーカー」の言語についての直観・内省・判断・知識などのデータは言語学研究の基準・根拠としてどれほど信用できるか？

例: Coulmas (1981a) ; Itkonen (1981) ; Wasow & Arnold (2005)

先行研究と位置付け

1. 研究方法論における妥当性の問題

一つの解決案:

言語学の規範としての「N」はさらに限定的でなければならない。規範としての「N」は理想的な「N」であり、あらゆる「N」のことではない。

例: Davies (2013)

カテゴリーをより細かく分ける。規範だと判断されないデータの提供者を「母語話者・ネイティブスピーカー」のカテゴリーから除外する。

例: Ballmer (1981); Coulmas (1981a)

先行研究と位置付け

1. 研究方法論における妥当性の問題

近年の言語学の方法論の議論:

統語論研究における直観データの信憑性を問題意識とし、「N」の直観データの特権的使用を批判し、言語学は科学的方法論に制約されるべき。

例: Wasow & Arnold (2005)

直観はしばしば言語学の唯一の根拠になる(例えば社会的アプローチの語用論研究)。厳密な研究方法論に基づいた実験が言語理論の選定に根拠づける。

例: Noveck & Sperber (2007=2012)

先行研究と位置付け

2. カテゴリーにまつわる権力関係と規範の問題

二項対立と権力構造:

カテゴリーは「母語話者・ネイティブスピーカー」と「非母語話者・ノンネイティブスピーカー」との二項対立をもたらし、そして、権力構造の側面は無視できない(「N」を理由にした正しさ)。

例: Doerr(2009a) ; Kubota(2009)

PS: マルクス主義系などの批判的応用言語学のバックグラウンドをお持ちの方からすれば常識かもしれませんが。

先行研究と位置付け

2. カテゴリーにまつわる権力関係と規範の問題

規範のモデルとしての「母語話者・ネイティブスピーカー」を想定すべきではない:

応用言語学における「母語話者・ネイティブスピーカー」への偏りは、人間のデフォルトの言語能力が単一言語だと誤って仮定したモノリンガルバイアス。「N」の性質の想定もこうした観点に基づいたものである。

例: Ortega (2014); Ortega (2018)

先行研究と位置付け

3. カテゴリー化の正当性そのもの

そもそも「母語話者・ネイティブスピーカー」のカテゴリーには正当性があるのか？言語イデオロギーやナショナリズムなどの要因によって構築されたものに過ぎないのでは？

「母語話者・ネイティブスピーカー」は科学的に正しいというより、政治的なものである故、言語学における適切なカテゴリーではない。

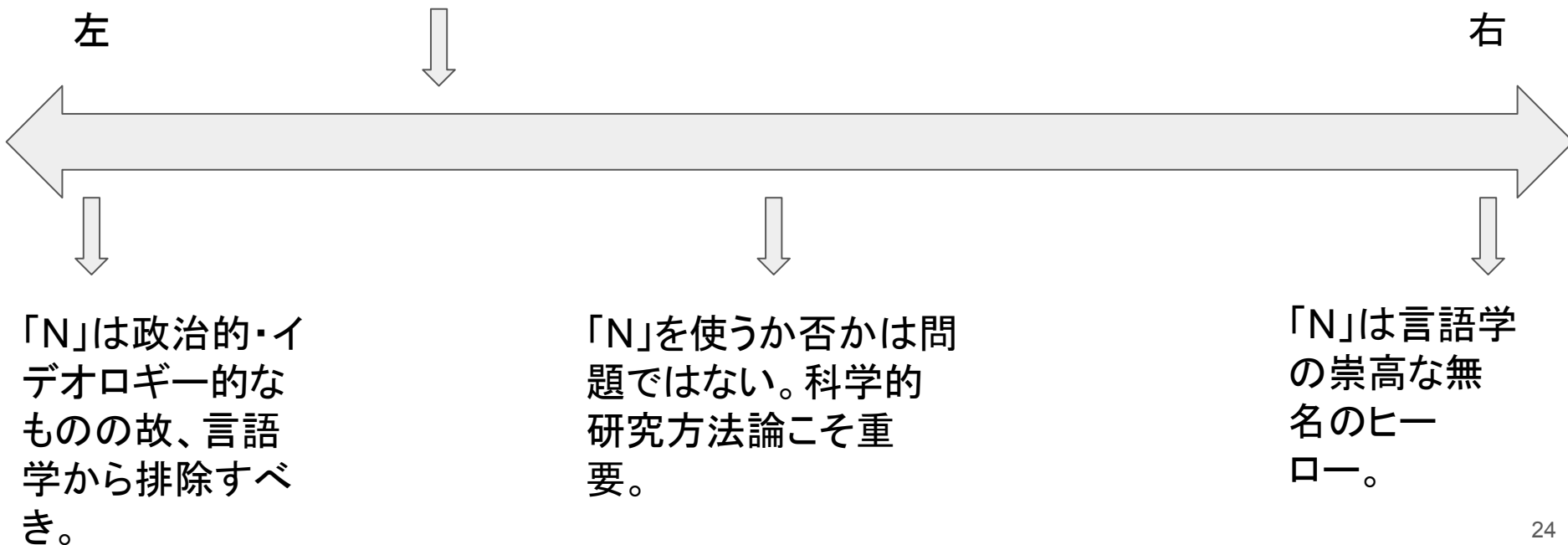
例：Muni Toke (2013)

先行研究と位置付け

本研究の位置付け:

もし政治的スペクトルを参照して、言語学的スペクトルを創ってみれば、

本研究はこの辺にあります。



目次

1. 問題意識
2. 先行研究と位置付け
- 3. 理論的な話を少し**
4. 実験について
5. 分析と考察
6. 結論と展望
7. 文献

理論的な話を少し

実験は発話解釈(語用論)において、

「N・NN」の仮説 VS 関連性理論の仮説

のどの仮説がより予測でき、説明力があるかを見る。

したがって、関連性理論における

二つのコア仮説+二つの補助仮説

を用います。

理論的な話を少し

二つのコア仮説:

1. 関連性の認知的原理: 人間の認知は関連性を最大化する傾向を有する。

(Sperber & Wilson, 1995, p.260; Wilson & Sperber, 2002, p.254, 引用者訳)

2. 関連性の伝達的原理: 全ての顕示的刺激は、それ自身が最適の関連性を有することの当然視を伝達している。

(Wilson & Sperber, 2002, p.256, 引用者訳)

理論的な話を少し

関連性の認知的原理を導出する過程:

1. 人間の認知には演繹的装置が存在する。

例:「PまたはQ」と「Pでない」があれば、自動的に「Q」を導出。

2. 演繹的装置の仮定により、認知効果を定義。効果があれば当然ながら労力もある。
3. 認知効果と処理労力によって関連性を定義。

認知効果↑関連性↑ 処理労力↑関連性↓

4. 関連性の認知的原理を導出。

関連性を最大化する=認知効果↑ 処理労力↓

理論的な話を少し

関連性の伝達の原理について:

1. 顕示的推論の伝達:ほとんどの人間のコミュニケーションにおける不可欠な特徴は意図の表現と認識。
2. 意図には①受け手に何らかの情報を伝達しようという意図。
②受け手に情報意図を認識させようという意図。
3. 顕示的推論は最適の関連性を有することの当然視を伝達している。
4. つまり、
①少なくとも受け手が処理するに値するだけの関連性を有する。
②伝達者の能力と選択に適合する範囲においての最も高い関連性を有する。

理論的な話を少し

関連性の伝達の原理について:

5. 帰結:

①処理労力を最小にする方向で認知効果を計算する: 接近可能な順序で解釈における仮説(一義化、指示対象付与、含意など)をテストしていく。

②関連性の期待が満たされた際に解釈を終了にする。

つまり、発話解釈は仮説を構築し、それをテストしていくプロセスの反復(ヒューリスティクス)である。

必ずしも解釈の正確さにはコミットせず、受け手の可能な限りに導き出した最善の解釈。

理論的な話を少し

二つの補助仮説:

1. 言語のコード化された意味は、発話の真理条件的内容を決定するには不十分である。(Carston, 2002a, p.366)

→発話の真理条件的内容を確定するには語用論的プロセスを介さなければならぬ。

2. 語用論的プロセスの一つとは、アドホック概念構築。

(Carston, 2000, p.41; Carston, 2002a, pp.204-205, p.220)

→アドホック概念は、発話の受け手が発話解釈の過程において関連性の期待に応じて即座に語用論的に構築した概念である。(Carston, 2002a, pp.322-323)

目次

1. 問題意識
2. 先行研究と位置付け
3. 理論的な話を少し
- 4. 実験について**
5. 分析と考察
6. 結論と展望
7. 文献

実験について

実験問題

「N」

VS

「NN」

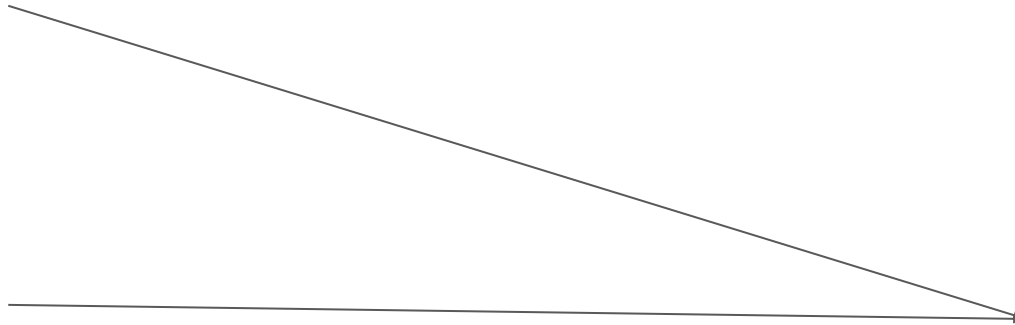
もし「NN」が「N」よりも「優れている」ようなデータを一個でも取れたらやっぱ「母語話者・ネイティブスピーカー」なんか間違ってるぞ

実験について

仮説A

VS

仮説B



実験問題の結果1

実験問題の結果2

○

○

○

○

実験問題の結果N-1

実験問題の結果N

どの仮説が実験問題の結果を
より予測でき、
より原理的に説明できるか、
を見る。

実験について

ネイティブスピーカー(あらゆるネイティブスピーカーのことを指す)は、以下の通りの六つの方法によって定義することが可能である。

- i. ネイティブスピーカーがL1を獲得するというのは、彼女・彼が子供の頃からはネイティブスピーカーであること。
- ii. ネイティブスピーカーは自身の個人的文法に(受容性と生産性の面においての)直観を持つ。
- iii. ネイティブスピーカーは自身の個人的文法とは異なる標準言語の文法に直観を持つ。
- iv. ネイティブスピーカーは流暢な自発的談話を産出するという独特な能力を有する。こうした談話は主に節を単位で区切り(「一回一節」の特徴)、そして完全な語彙項目による膨大な記憶によって促進される。産出と理解の何れの面においても、ネイティブスピーカーは幅広いコミュニケーション能力を示す。
- v. ネイティブスピーカーは創造的に書くという独特な能力を有する(もちろん、ジョークから叙事詩まで、メタファーから小説までのあらゆるレベルの文学を含む)。
- vi. ネイティブスピーカーはネイティブスピーカーのL1で解釈・翻訳するという独特な能力を有する。個人の能力による意見の相違は標準、ないしは(標準)言語に関する紛争に起因する可能性がある。

(Davies, 2004, p.435, 引用者訳)

実験について

ここにおいて比較的に重要なのは、

iv. ネイティブスピーカーは流暢な自発的談話を産出するという独特な能力を有する。こうした談話は主に節を単位で区切り(「一回一節」の特徴), そして完全な語彙項目による膨大な記憶によって促進される。産出と理解の何れの面においても, ネイティブスピーカーは幅広いコミュニケーション能力を示す。

vi. ネイティブスピーカーはネイティブスピーカーのL1で解釈・翻訳するという独特な能力を有する。個人の能力による意見の相違は標準, ないしは(標準)言語に関する紛争に起因する可能性がある。

なぜなら、第四番は語用論の面に関する「母語話者・ネイティブスピーカー」の定義であり、第六番は発話解釈に関わる定義。(Davies, 2004, p.436)

しかし...

実験について

そもそも前述の定義は「母語話者・ネイティブスピーカー」に双条件法的に定義できると期待しなくて良い。

しかし、「N」と「NN」には何かの違いがあるはず、と仮定しなければ、そもそも「N」を定義しようとしないうだろう。

したがって、実験におけるミニマリズムとしての「N・NN」の仮説:

語用論(発話解釈)においても、「N・NN」の二分法を基準にした明確な傾向、ないしは境界線が存在するはず。

実験について

語用論(発話解釈)においての

「N・NN」の
仮説

VS

関連性理論
の仮説

仮説同士の比較が本研究の実験デザインの根拠

実験について

実験問題の例

化学式 H_2O で表され、水素と酸素の化合物は、
日常では「 a 」と呼ばれる。

分からない

答え:

実験について

「化学式H₂Oで表される水素と酸素の化合物の名前 ≡ a」

aは関連性の期待に応じてa*といったアドホック概念を構築するように仮定する。

解釈者の認知環境においては、

「化学式H₂Oで表される水素と酸素の化合物の名前 ≡ 水」

が存在すれば、

「化学式H₂Oで表される水素と酸素の化合物の名前 ≡ 水 ≡ a*」

が成立し、

問題の「a」とは「水」のことといったメタ言語レベルの判断を推論的に導き出す。

PS: やや極端な実験問題にはなるが、発話解釈のメカニズムをより明確に判断できるためであった。

実験について

注意①

関連性理論に従えば、

言語表現の意味への推論は解釈者の認知環境に依存する

実験問題における命題を推論によって真偽判断可能なレベルまで補完しなければならない(真理条件的内容を確定しなければならない)→語用論のプロセス

注意②

正答できないから優劣がつかうわけではない。

どの仮説が実験結果をより予測・説明できるかを見る。

実験について

細部について

- 穴埋め問題であり、「分からない」の選択肢をのみ設ける
- 制御問題: 5問

統計問題: 10問



20問*4名=80のサンプル

非統計問題: 5問

- 統計問題＋非統計問題を紙媒体、一問ずつ、且つランダムに引いてもらう
- 二重盲検法(事前に必要な情報を説明、実験後に実験の趣旨を説明)
- 録画＋問題用紙を基にデータ収集

実験について

実験協力者の選出について

1. 「N・NN」の全員は非研究的文脈における実験言語の「N・NN」である。

非研究的文脈における「N・NN」を仮定することと、研究的文脈における「N・NN」の仮説の放棄を主張することは矛盾ではない(例:「自然主義者にとっての「超常現象」の表現を類比して頂きたい)。

2. 「N」はDavies(2004)における仮の「N」の定義を全て満足しなければならず、「NN」は当該定義の全てを満たしていないことを第二の基準とする。

定義の不備を利用して結果を不正操作する可能性を排除、同時に仮説の支持者の主張する「N・NN」とも一致する。

3. 制御問題の5問を全て正解した方。

回答の方針を理解できていないまま回答して頂く可能性を避ける。

実験について

実験協力者の選出について

1. 実験協力者A: 実験言語の「N」であり、且つモノリンガルである。
 2. 実験協力者B: 実験言語の「N」であり、且つバイリンガルである。
 3. 実験協力者C: 実験言語の「NN」であり、したがってバイリンガルである。
 4. 実験協力者D: 実験言語の「NN」であり、したがってバイリンガルである。
- 4名の実験協力者の制御問題を回答した時点の各々の職業や大学時代の専攻などの情報をベースに、実験問題を作成(すなわち、正答できるか否かを仮説に基づき予測し、意図的に作られた実験問題となる。したがって、実験協力者の直観はそもそも分析対象にはならない)。
 - 実験の際に実験協力者の4名は何れも身体的・精神的健康状態が良好。

実験について

- 4名の実験協力者より合計で80のサンプルを収集する(実験協力者の直観などのデータから帰納的に結論を得るわけではない故、実験協力者の数は実験の結果に対する影響は少ないように思われる)。
- どの仮説がサンプルの結果をより予測・根本的に説明できるかを見る。

目次

1. 問題意識
2. 先行研究と位置付け
3. 理論的な話を少し
4. 実験について
- 5. 分析と考察**
6. 結論と展望
7. 文献

分析と考察

制御問題の5問

表1		A		B		C		D	
制御問題	正解例	関連性の予測	回答・反応時間	関連性の予測	回答・反応時間	関連性の予測	回答・反応時間	関連性の予測	回答・反応時間
i	渋谷駅で約10年間飼い主の帰りを待ち続けた秋田犬、その名前は「 a 」だ。	高 ▾	八チ公 正答 ▾ 7.3秒	高 ▾	八チ公 正答 ▾ 6.0秒	高 ▾	八チ公 正答 ▾ 6.1秒	高 ▾	八チ 正答 ▾ 7.1秒
ii	化学式H ₂ Oで表され、水素と酸素の化合物は、日常では「 a 」と呼ばれる。	高 ▾	水 正答 ▾ 5.5秒	高 ▾	水 正答 ▾ 10.6秒	高 ▾	水 正答 ▾ 17.9秒	高 ▾	水 正答 ▾ 5.7秒
iii	西暦2018年のイギリスの首都は、「 a 」という都市だ。	高 ▾	ロンドン 正答 ▾ 5.0秒	高 ▾	ロンドン 正答 ▾ 7.8秒	高 ▾	ロンドン 正答 ▾ 16.5秒	高 ▾	ロンドン 正答 ▾ 12.6秒
iv	「トムは猫だ」をPとする、「否定」を¬とする、「または」を∨とする、 $\neg \neg P \vee P$ は「 a 」だ。	論理形式 ▾	否定トムは猫だ、またはトムは猫だ 正答 ▾ 88.0秒	論理形式 ▾	トムは猫ではない、またはトムは猫だ 正答 ▾ 88.8秒	論理形式 ▾	トムは猫ではない、またはトムは猫だ 正答 ▾ 113.6秒	論理形式 ▾	トムは猫かもしれない 正答 ▾ 133.0秒
v	「xは犬だ」をFxとする、「全てのx」を∀xとする、 $\forall x Fx$ は「 a 」だ。	論理形式 ▾	全てのxは犬だ 正答 ▾ 67.7秒	論理形式 ▾	全てのxは犬だ 正答 ▾ 62.5秒	論理形式 ▾	全てのxは犬だ 正答 ▾ 44.8秒	論理形式 ▾	全てのxは犬だ 正答 ▾ 62.2秒

制御問題については以上の結果で全員とも正答となる。

分析と考察

ミニマリズムの「N・NN」の仮説による予測:

- 「N」データと「NN」データにはある程度の傾向・けじめがある。
- もしかすれば「N」データは「NN」データよりも正確的で反応速度が速い傾向がある？←ただし、ミニマリズムとしての「N・NN」の仮説はこの予測をコミットしないはず、といった点は要注意。

分析と考察

関連性理論の仮説による予測:

- 関連性が高ければ反応速度が早く、解釈者の個人の認知環境により、正解か否かはかなりの程度のばらつきが存在する。
- さらに、実験の問題デザインにより、**関連性が低ければ「正答」を推論的に導出する際に利用される命題を顕在的にすることがより困難になり、すなわちより「誤答・無答」になりやすい。**

分析と考察

ミニマリズムの
「N・NN」の仮説
による予測

VS

関連性理論
の仮説による
予測

仮説同士の比較

分析と考察

統計問題の10問(上)

表2			A		B		C		D	
	統計問題	正解例	関連性の予測	回答・反応時間	関連性の予測	回答・反応時間	関連性の予測	回答・反応時間	関連性の予測	回答・反応時間
			i	当社サービスの認知度を向上させるため、「 a 」などのマーケティング施策を実施した。	プロモーション	高 ▾	広告 正答 ▾ 17.6秒	高 ▾	PR 正答 ▾ 21.3秒	高 ▾
ii	五月雨納品でも問題ありませんが、画像はなるべくレイヤー分けの「 a 」データを頂きたいです。	PSD	高 ▾	psd 正答 ▾ 12.1秒	高 ▾	PSD 正答 ▾ 8.8秒	高 ▾	psd 正答 ▾ 19.9秒	高 ▾	PSD 正答 ▾ 19.3秒
iii	A: 「 a 」行ってきます! B: 「受注」のこと? 顧客目線じゃなくて良いよ。	発注	高 ▾	発注 正答 ▾ 21.0秒	高 ▾	発注 正答 ▾ 12.4秒	低 ▾	× 無答 ▾ 55.6秒	低 ▾	× 無答 ▾ 17.7秒
iv	違う、ここは生物学的性別の話じゃない。「 a 」は社会的、文化的に形成された性別のことだ。	ジェンダー	高 ▾	ジェンダー 正答 ▾ 18.1秒	高 ▾	雌雄 誤答 ▾ 50.4秒	低 ▾	人間 誤答 ▾ 58.2秒	低 ▾	後天的性別 正答 ▾ 46.8秒
v	「 a 」が好きとは言え、ザ・マッカランしか好まないようだ。	スコッチウイスキー	低 ▾	ロック 誤答 ▾ 13.7秒	低 ▾	ウイスキー 正答 ▾ 5.7秒	高 ▾	酒 正答 ▾ 31.7秒	高 ▾	ウイスキー 正答 ▾ 8.4秒

分析と考察

統計問題の10問(下)

vi	あの人はナショナリズムと資本主義に反対するので、政治的スペクトルで言えば「 a 」寄りに違いない。	左翼	低	右	誤答 36.2秒	低	x	高	左翼	正答 13.7秒	高	左	正答 20.6秒
vii	アメリカ「 a 」言語学と呼ばれる分野は、原住民の言語を研究することを目的とし、認知革命以前の言語学の主流だと言われている。	構造主義	低	x	無答 36.5秒	低	民俗	低	x	無答 18.1秒	低	x	無答 29.9秒
viii	真理に興味のある者なら分かることだ。「雪が白い」は標準的な「 a 」条件の例文だ。	真理	低	x	無答 17.7秒	低	x	低	真理	正答 32.4秒	低	x	無答 40.8秒
ix	「ハチコはボーダー・コリーである」をPとする、「ハチコはゴールデン・レトリバーである」をQとする、「否定」を \neg とする、「且つ」を \wedge とする、「ハチコはボーダー・コリーであるか、またはゴールデン・レトリバーである、ということはない」は「 a 」だ。	$\neg P \wedge \neg Q$	論理形式	$\neg (P \wedge Q)$	誤答 56.6秒	論理形式	$\neg P \wedge \neg Q$	論理形式	$\neg (P \wedge Q)$	誤答 65.8秒	論理形式	$\neg (P \wedge Q)$	誤答 69.5秒
x	「xは犬だ」をFxとする、「全てのx」を $\forall x$ とする、「否定」を \neg とする、「あるxは犬ではない」は「 a 」だ。	$\neg \forall x Fx$	論理形式	$\neg \forall x \neg Fx$	誤答 184.9秒	論理形式	$\neg \forall x \neg Fx$	論理形式	$\neg \forall x \neg Fx$	誤答 68.6秒	論理形式	$\neg \forall x \neg Fx$	誤答 46.6秒

分析と考察

非統計問題の5問

表3			A			B			C			D		
	非統計問題	正解例	関連性の予測		回答・反応時間		関連性の予測		回答・反応時間		関連性の予測		回答・反応時間	
			i	マラブロピズムは一種の「 a 」だろう？ 駄洒落みたいなものだ。	言葉遊び	高	×	無答 8.2秒	高	×	無答 42.6秒	高	×	無答 19.7秒
ii	メディア「 a 」教育が上手くいくあまり、 彼女はSNSから入手したあらゆる情報でも 批判的に分析するようになっている。	リテラシー	高	×	無答 18.6秒	高	英才	誤答 18.8秒	低	コミュニケーション	誤答 74.1秒	低	分析	誤答 52.9秒
iii	ソ連のあのライカちゃんになって欲しくない。 「 a 」なんかに行かなくて良いよ。	宇宙	低	ロシア	誤答 19.7秒	低	×	無答 14.2秒	高	月	誤答 39.7秒	高	宇宙	正答 12.1秒
iv	「 a 」という分野は意味論と対照に、 かつてはコードとその解釈者との関係 を扱う分野だと定義されていた。	語用論	低	×	無答 28.4秒	低	×	無答 37.3秒	低	論理	誤答 36.5秒	低	×	無答 48.6秒
v	「xはyを愛する」をFxyとする、 「全てのx」を∀xとする、 「あるx」を∃xとする、 「誰でも愛する者がいる」は「 a 」だ。	∀x∃yFxy	論理 形式	F∀x愛する∃x	誤答 294.3秒	論理 形式	∀x∃yFxy	正答 66.6秒	論理 形式	F∃x∀y	誤答 54.4秒	論理 形式	∀xx∃x	誤答 68.8秒

分析と考察

- より多くのサンプルや反復実験などにより結果の精度を上げることが今後の課題。
- 今回の結果は概ね関連性理論の仮説の予測と一致する。
- ただしいくつかの例外もあったため、フォローアップを実施。

分析と考察

フォローアップ:

- 実験協力者Dの統計問題の第四問:

違う、ここは生物学的性別の話じゃない。
「 a 」は社会的、文化的に形成された性別のことだ。

「後天的性別」で正答。

確かに実験協力者Dとは関連性の低い問題だった。

記述から「後天的性別」といった回答を推論的に導き出した結果となり、「ジェンダー」といった言語表現を顕在的に出来なかったことが分かった。「後天的性別」は「ジェンダー」とは一部の外延が一致する故、正答だと実験者に判断された。

分析と考察

フォローアップ:

- 実験協力者Bの統計問題の第五問

「 a 」が好きとは言え、
ザ・マッカランしか好まないようだ。

「ウイスキー」で正答。

実験協力者Bはウイスキーバーでの勤務経験があるといった事情を事前に把握できず、実際のところ関連性の予測の高い実験問題となる。

関連性理論の仮説の予測に反さず、むしろ当該仮説を支持する根拠になる。

分析と考察

フォローアップ:

- 実験協力者Cの統計問題の第八問

真理に興味のある者なら分かることだ。
「雪が白い」は標準的な「 a 」条件の例文だ。

「真理」で正答

実験協力者Cは何処かで「真理条件」といった表現に触れた経験があり、記述により「真理条件」といった言語表現を顕在的にできた結果となる。関連性が低いとは言え、まったく顕在化できないほど低くはなかった故、関連性理論の仮説に反するとは言えない。

ただのバリ エーション じゃ！



イラスト出典：https://www.irasutoya.com/2017/06/blog-post_871.html

使用注意：<https://www.irasutoya.com/p/terms.html>

2020年2月20日閲覧

「N・NN」の仮定によってバリエーションを説明できず、さらに他の付加オプションを追加しなければならぬ仮説

VS

「N・NN」の仮定を持ち出さず、且つバリエーションを説明できた仮説

2つから1個を選べばどの仮説がより優秀？

分析と考察

「N・NN」の二分法の仮説がうまく機能する場合、カテゴリーに属するメンバーの認知環境が概ね一致するといった仮定のみならず、推論における規則も概ね一致しなければならないと仮定する必要がある。

こうした仮定の内実、ないしは成因はあまりにも複合的なものであるが、「N・NN」の仮説はこうした仮定を暗黙のうちに認めている。にもかかわらずその成因には説明しない。

したがって、言語共同体(=「母語話者・ネイティブスピーカー」)の仮説は言語学研究にとってはあまりにも簡略なものである。

分析と考察

結論：

少なくとも語用論（発話解釈）の面においては、言語共同体（＝「母語話者・ネイティブスピーカー」）は言語学研究的仮説としては必ずしも揺るぎ無いものではない。

目次

1. 問題意識
2. 先行研究と位置付け
3. 理論的な話を少し
4. 実験について
5. 分析と考察
- 6. 結論と展望**
7. 文献

結論と展望

本研究における結論は以下の通りに主張することができよう。

論理上のみならず、経験的事実の面においても、言語共同体(=「母語話者・ネイティブスピーカー」)は言語学研究の仮説としては必ずしも揺るぎ無いものではない。

こうした結論は実験などの制限により非常に弱い主張にはなるが、「N・NN」における二分法は言語学研究の仮説としてはあまりにも簡略なものであり、こうした仮説への更なる熟考の契機、及び当該仮説に依存しない言語学研究に移行する動機としては貢献できるものだと思われる。

結論と展望

本研究は「N」と「NN」を比較していない。

本研究は「N」と「NN」との優劣をも評価していない。

例えば数多くの「N」が「NN」よりも言語能力が優れているようなデータを提示されても(その逆も同様であるが)、本研究の結論を無効にできない。

なぜなら、本研究は言語現象に対しては「N・NN」の仮説による説明、ないしは研究の前提として持ち出すべきではない、としか主張していない。

なぜなら「N・NN」は根本的な説明を与えることのできず、問題点の多い仮説だからだ。

根本的な説明は他にあり(例えば今回の関連性理論)、そしてこうした説明は「N・NN」といった問題点の多い仮説を持ち出さなくても済めば、この意味だけにおいても優れた仮説だと評価できよう。

結論と展望

三つの展望:

1. さらに多くの証拠が必要である。そして、本研究は「N・NN」の仮説は徹底的に偽だと主張していない。仮説の支持者によりバリエーションよりも本質的な説明を提示し、仮説をより発展していくことも不可能ではない。
2. 「N・NN」の仮説を諦めるべきと主張する際に、原因に関する説明、及び代案との二点を提示しなければならない。本研究の提示した説明・代案は満足のものかはより詳細に検討する必要がある。

結論と展望

三つの展望:

3. 言語の意味における規範は「N・NN」になく、少なくとも実践における共同体に存在すると暗示しているように思われる。しかしこうした観点は関連性理論の理論的枠組みとは相容れないものである。意味は共同体の規範にあると認めなくても、共同体の規範（または少なくとも規範だとみなされること）がメタ意味論のレベルに影響することも想定され得る。より詳細に議論する価値があるだろう。

目次

1. 問題意識
2. 先行研究と位置付け
3. 理論的な話を少し
4. 実験について
5. 分析と考察
6. 結論と展望
- 7. 文献**

文献

- [1]Allott,N.(2013)"Relevance theory," in A.Capone, F.Lo piparo and M.Carapezza (eds), Perspectives on Linguistic Pragmatics, Berlin: Springer.
- [2]Ballmer,Th.T.(1981)"A Typology of Native Speakers," in F.Coulmas (ed), A Festschrift for Native Speaker, Mouton.
- [3]Carston,R.(2000)"Explicature and semantics," UCL Working Papers in Linguistics 12, pp.1-44.
- [4]Carston,R.(2001)"Relevance theory and the saying/implicating distinction," UCL Working Papers in Linguistics 13, pp.1-34.
- [5]Carston,R.(2002a)Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication, Oxford: Blackwell.
- [6]Carston,R.(2002b)"Metaphor, ad hoc concepts and word meaning - more questions than answers," UCL Working Papers in Linguistics 14, pp.83-105.
- [7]Carston,R.(2003)"Truth-conditional content and conversational implicature," UCL Working Papers in Linguistics 15, pp.35-69.
- [8]Carston,R.(2006)"Linguistic Communication and the Semantics/Pragmatics Distinction," UCL Working Papers in Linguistics 18, pp.37-69.
- [9]Carston,R.(2009)"The explicit/implicit distinction in pragmatics and the limits of explicit communication," International Review of Pragmatics 1(1), pp.35-62.
- [10]Carston,R.(2019)"Ad Hoc Concepts, Polysemy and the Lexicon," in K.Scott, B.Clark, R.Carston (eds), Relevance, Pragmatics and Interpretation, Cambridge University Press.

文献

[11]Chomsky,N.(1965)Aspects of the Theory of Syntax, MIT Press.

[12]Coulmas,F.(1981a)"Introduction: The Concept of Native Speaker," in F.Coulmas (ed), A Festschrift for Native Speaker, Mouton.

[13]Coulmas.F.(ed)(1981b)A Festschrift for Native Speaker, Mouton.

[14]Davies,A.(1991)The Native Speaker in Applied Linguistics, Edinburgh University Press.

[15]Davies,A.(2003)The Native Speaker: Myth and Reality, Multilingual Matters.

[16]Davies,A.(2004)"The Native Speaker in Applied Linguistics," in A.Davies, and C.Elder (eds), The Handbook of Applied Linguistics, Blackwell.

[17]Davies,A.(2013)"Is the native speaker dead?," Histoire Épistémologie Langage 35(2), pp.17-28.

[18]Doerr,N.(2009a)"Investigating 'native speaker effects': Toward a new model of analyzing 'native speaker' ideologies," in N.Doerr (ed), The Native Speaker Concept: Ethnographic Investigations of Native Speaker Effects, Mouton.

[19]Doerr,N.(ed)(2009b)The Native Speaker Concept: Ethnographic Investigations of Native Speaker Effects, Mouton.

[20]Fodor,J.(1975)The Language of Thought, Crowell.

文献

[21]Grice,H.P.(1957)"Meaning," The Philosophical Review 66, pp.377-388.

[22]Grice,H.P.(1968)"Utterer's Meaning, Sentence Meaning, and Word Meaning," Foundations of Language 4, pp.225-242.

[23]Grice,H.P.(1969)"Utterer's Meaning and Intentions," The Philosophical Review 78, pp.147-177.

[24]Grice,H.P.(1975)"Logic and Conversation," in P.Cole and J.Morgan (eds), Syntax and Semantics 3: Speech Acts, Academic Press.

[25]Grice,H.P.(1989)Studies in the Way of Words, Harvard University Press.

[26]Itkonen,E.(1981)"The Concept of Linguistic Intuition," in F.Coulmas (ed), A Festschrift for Native Speaker, Mouton.

[27]Kubota,R.(2009)"Rethinking the superiority of the native speaker: Toward a relational understanding of power," in N.Doerr (ed), The Native Speaker Concept: Ethnographic Investigations of Native Speaker Effects, Mouton.

[28]Muni Toke,Valelia.(2013)"Native speaker: From idealization To politicization," Histoire Épistémologie Langage 35(2), pp.69-93.

[29]Neale,S.(1992)"Paul Grice and the Philosophy of Language," Linguistics and Philosophy 15(5), pp.505-559.

[30]Noveck,I.(2018)Experimental Pragmatics: The Making of a Cognitive Science, Cambridge University Press.

文献

- [31]Noveck,I. & D.Sperber.(eds)(2004)Experimental Pragmatics, Palgrave Macmillan.
- [32]Noveck,I. & D.Sperber.(2007)"The why and how of experimental pragmatics: The case of 'scalar inferences'," in Burton-Roberts (ed), Pragmatics, Palgrave Macmillan; reprinted in Wilson,D. & D.Sperber.(2012)Meaning and Relevance, Cambridge University Press.
- [33]Ortega,L.(2014)"Ways Forward for a Bi/Multilingual Turn in SLA," in S.May (ed), The Multilingual Turn: Implications for SLA, TESOL, and Bilingual Education, Routledge.
- [34]Ortega,L.(2017)"New CALL-SLA Research Interfaces for the 21st Century: Towards Equitable Multilingualism," CALICO Journal 34(3), pp.285-316.
- [35]Ortega,L.(2018)"SLA in Uncertain Times: Disciplinary Constraints, Transdisciplinary Hopes," Working Papers in Educational Linguistics, 33(1), pp.1-30.
- [36]Ortega,L.(2019)"SLA and the Study of Equitable Multilingualism," The Modern Language Journal 103, pp.23-38.
- [37]Pinker,S.(1994)The Language Instinct: How the Mind Creates Language, William Morrow and Company.
- [38]Recanati,F.(2004)Literal Meaning, Cambridge University Press.
- [39]Searle,J.R.(1978)"Literal Meaning," Erkenntnis 13, pp.207-224.
- [40]Sperber,D. & D.Wilson.(1986)Relevance: Communication and Cognition, Oxford: Blackwell; (1995)2nd edition, MA: Harvard University Press.

文献

[41]Sperber,D. & D.Wilson.(1995)"Postface," in Sperber,D. & D.Wilson, Relevance: Communication and Cognition 2nd edition, MA: Harvard University Press.

[42]Train,R.(2009)"Toward a 'natural' history of the native (standard) speaker," in N.Doerr (ed), The Native Speaker Concept: Ethnographic Investigations of Native Speaker Effects, Mouton.

[43]Wasow,T. & J.Arnold.(2005)"Intuitions in Linguistic Argumentation," *Lingua* 115(11), pp.1481-1496.

[44]Wilson,D.(2014)"Relevance Theory," *UCL Working Papers in Linguistics* 26, pp.129-148.

[45]Wilson,D. & Carston,R.(2007)"A Unitary Approach to Lexical Pragmatics: Relevance, Inference and Ad Hoc Concepts," in Burton-Roberts (ed), *Pragmatics*, Palgrave Macmillan.

[46]Wilson,D. & D.Sperber.(1993)"Linguistic form and relevance," *Lingua* 90, pp.1-25; reprinted in Wilson,D. & D.Sperber.(2012)*Meaning and Relevance*, Cambridge University Press.

[47]Wilson,D. & D.Sperber.(2002)"Relevance Theory," *UCL Working Papers in Linguistics* 14, pp.249-287.

[48]Wilson,D. & D.Sperber.(2012)*Meaning and Relevance*, Cambridge University Press.

[49]徐子程(2019a)「言語学研究における『共同体前提』は如何に正当化され得るか」『言語学習と教育言語学： 2018年度版』, pp.29-39.

[50]徐子程(2019b)「真理条件無き意味と関連性理論について」『信学技報』 Vol.119, no.114, pp.13-18.

[51]徐子程(forthcoming)「言語学研究における『言語共同体』は経験的に揺るぎ無いものか：実験語用論によるケーススタディー」